

聖書：士師記14章10～20節

説教：主の霊が下る

はじめに

聖書の歴史を振り返ると、モーセによってエジプトから脱出してきたイスラエル民族は、約束の地であるカナンに入ったわけですが、そこにはすでに異教の神々を拝むペリシテ人が住んでいました。当然のことですがペリシテ人がよく思うはずはありません。いつも両者の間に常に争いが絶えません。サムソンが生まれたのは、ペリシテ人によって苦しめられていたときです。その苦しみからイスラエルを救うのがサムソンだと言われていました。しかし今日のところを読んで、どこにも神の救いがあるとは思えません。いったいどこに神の恵みがあるのか。ともに考えてまいります。

1 サムソン

1) ペリシテ人の妻を迎える

事件は、サムソンがペリシテ人の女性を妻に迎えたいと言いだしたところから始まります。両親はこれを聞いて、「よりによって自分たちの敵から妻を迎えようとするのか」と言って大反対する。しかしサムソンは、親の意見を聞こうともせず、結婚したいと言い張る。結局父親は、しぶしぶサムソンに従って結婚披露宴に出席することになってしまいます。

2) 謎をかける

いまの結婚披露宴はせいぜい2時間程度でしょうか。しかしこの時代は七日間続くのがあたりまえでした。当時の習慣として、ここにあるように懸賞金付きの謎解きをしながら時間を過ごします。サムソンが出した謎はこうでした。14節。「食らうものから食べ物が出た。強いものから甘い物が出た。（さてそれはなんでしょう）」たとえば、「おうちにあるもので絶対食べられないパンはなに」（答え）「フライパン」これくらいなら誰でも答えられるでしょう。でもサムソンが出した謎はどうでしょうか。私たちは、前回も触れましたが14章前半に書かれていたことを読んでいますので、答えがわかる。でもなにも知らない人たちににとってはどうでしょう。6節に「主の霊が激しくからの上に下った」とあるように、サムソンがライオンを倒し、そのライオンのからだから蜂蜜が出たというのは、神の力によるきわめて特殊なできごとです。だれも思いつきません。この事件のことを

サムソンは誰に教えていません。ペリシテ人たちが答えがわからなくて悩むのは当然です。おめでたい席なのだから、そこを配慮してみなが楽しめる問題を出すべきではないか。ここでもサムソンの性格が見えてきます。ほかの人と一緒に楽しむという気持ちはまったくありません。あなたがたペリシテ人は、条件なしでゲームに参加したでしょう。だったらどんな問題を出そうが文句は言わせない。そういう態度なのです。

2 ペリシテ人

1) サムソンの妻を脅迫する

案の定ですが、ペリシテ人は答えが見つからず困り果て、サムソンの妻を呼び出してこう言う。15節。「おまえの夫を口説いて、あの謎をわれわれに明かしなさい。そうしないと、火でおまえとおまえの父の家を焼き払ってしまうぞ。おまえたちはわれわれからはぎ取ろうとして招待したのか。そうではないだろう。」こんなふうに脅迫された妻は恐ろしくなって、サムソンに泣いてすがり、とうとう根負けしたサムソンは答えを教えてしまいました。

こうして三十人のペリシテ人は締め切りぎりぎり謎に答えたわけですが、彼らが妻を脅迫して自分から聞き出したことをサムソンは知っている。それでサムソンは18節後半でこう言い返す。「もし、私の雌の子牛で耕さなかったなら、あなたがたは私の謎を解けなかっただろうに。」雌の子牛というのは、サムソンの妻のことです。おまえたちは、雌の子牛で畑を耕すような非常識なことをしたのだと皮肉を言った。しかし、どんな方法であれ謎を解き明かしたことは事実です。謎かけゲームは、「答えを見つけることができたなら、あなたがたに亜麻布三十着と晴れ着三十着を差し上げる」という約束で始まりました。謎かけの内容について条件をつけなかったように、答えを見つけ出す方法についても条件はない。相手が卑怯な手を使ったとしてもサムソンは約束を果たさなければなりません。

2) 主の霊が下る

それでどうしたか。19節。「そのとき、主の霊が激しくサムソンの上に下った。彼はアシュケロンに下って行って、そこの住民を三十人打ち殺し、彼

らからはぎ取って、謎を明かした者たちにその晴れ着をやり、怒りに燃えて父の家に帰った。」

これはどうなのでしょう。三十人打ち殺すというのは、やり過ぎではないのか。乱暴者のサムソンが個人プレーだというのならまだわかる。しかし聖書には、「そのとき、主の霊が激しくサムソンの上に下った」とあって、神がこの事態を推し進めている。これをどう考えたらよいのか。神は平和の神ではないか。であるならば、人を殺すようなことはせず、むしろ争いを止めるために働くべきではないのか。ところがここでは、神は積極的に争いごとが起きるようにと働きかけていく。そこでまた私たちはつまづいてしまいます。

3 神のさばきと救い

1) イスラエルの罪

こういうときはスタート地点に戻って考えた方がよい。そもそもイスラエルがペリシテ人によって苦しむことになった原因はなんであったか。13章1節にある。「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねておこなった。そこで主は四十年間、彼らをペリシテ人の手に渡された。」神の戒めを守らずに、偶像を拝み、律法を軽んじて自分勝手なことをし、罪を重ねていった。それが主の目に悪であることでした。イスラエルが罪を犯したために苦しむことになった。そこがスタートです。いまなら「自己責任」とか「身から出た錆」と言われて終わりでしょう。

しかし、聖書はそこで終わりません。イスラエルが苦しんでいたときに、主はマノア夫婦に使いを送り、サムソンがイスラエルを救い始めると告げます。主に背いて罪を犯したのにもかかわらず、主はいつまでイスラエルが苦しんでいるのを忍びがたいと思われて、救いの手を差し伸べるべます。その役割を果たしていくのが、ナジル人の誓いのもとで大切に育てられたサムソンでした。

ところがサムソンは、律法を平気で破り、自分の欲望の赴くままにペリシテ人の女性と結婚したいと言いだし、父親の意見にも聞き従わない。そのうえ、巧妙な手段を使って相手から取れるものは取るという欲深ささえもっている。なぜこんな人間が、イスラエルを救う人に選ばれたのか。とても理解できません。それも主の霊がサムソンに下るといようにしてまでして、サムソンは罪を重ねていくようになっている。イスラエルのあらゆる罪を背負い、それを目に見える形で実行しているのがサムソンではないのか。どうもそんなふうに見えてくるのです。

2) 救いを求めるために

みなさんは、「神が私たちを救ってくださる」ということばを聞いたとき、どんなことを想像するでしょうか。神さまは、私がこれまで犯してきたたくさんの罪を水に流してくれて、真っ白なからだにしてくれて私を天国に迎えてくださる。そんなイメージでしょうか。そう考えたい気持ちはわかります。しかし一つだけ間違いがある。罪を水に流せば、罪を見なくて済みます。日本文化では昔からそう考える。しかし、神は罪を水に流すようなことは絶対にしません。むしろ反対に、自分の罪を見るようにと促します。見たくないものを見させられたら苦しくなります。なぜそこまでするのか。苦しくなって初めて私たちは神に救いを求めていく。こうしないと私たちは神に戻ることができないからです。主が、イスラエルをペリシテ人の手に渡されたのもそのためです。イスラエルが神に立ち戻り、救いを求めるようにするためでした。ではサムソンのことはどうなるのか。

3) 十字架のイエス・キリスト

そこで最後に考えます。サムソンとイエス・キリストとのあいだになにか共通点があるでしょうか。何もないように見えますが、二つあります。一つ目。主の使いが語ったとおり、サムソンはいのちを捨ててイスラエルを救っていきます。そのことは16章の最後のところに出てきます。二つ目。サムソンは、まるでイスラエルの代表選手のようにあらゆる罪を犯していきます。主イエス・キリストは私たちのあらゆる罪を背負われましたが、罪を犯すことはありませんでした。ですからサムソンとまったくちがうと思うかもしれませんが、このことはコインに似ています。コインには裏と表があります。私たちは表側の主を見ていますが、けれども、裏を返せばこの方は私たちの罪を背負われているのです。実際にするか、しないかの違いはありますが、罪人の姿をとられたというところではサムソンと同じです。こんなことを言うのが驚くのでしょうか。では質問します。主はどうして十字架でさばかれたのですか。罪を背負われたからです。サムソンの姿をとおして、私たちは教えられます。私たちがふだん見落としていた主のもう一つのお姿、それを見るように。サムソンは私たちの罪そのもの。しかし主はその私たちの罪を背負われた。そうして救いを私たちに与えてくださった。サムソンの姿を通して、主の救いが示されている。そのことをもう一度覚えたいと思います。

